

三六災害の記録

濁流の子」の續纂を振り返つて

碓田栄一

三六災害の記録

濁流の子」の續纂を振り返つて

碓田栄一

目次

一 はじめに.....	1
二 三六災害と『濁流の子』.....	2
三六災害.....	2
『濁流の子』とは.....	4
三 三六災害の発生と被災地受験生の支援.....	5
三六災害の記憶.....	5
高校受験生を励ます活動.....	5
「濁流の中の高校受験生」の製作を企画.....	10
被災生徒の作文.....	11
四 『濁流の子』の製作.....	13
『濁流の子』の製作開始.....	15
編集・製本作業.....	16
『濁流の子』の完成.....	21
五 『濁流の子』製作のその後.....	24
復刻版の製作.....	24
『続・濁流の子』の製作.....	27
人と暮らしの伊那谷遺産プロジェクト.....	28
語り継ぐ『濁流の子』プロジェクト.....	30
六 『濁流の子』の取り組みを振り返って.....	34
製作当時を振り返って.....	34
復刻されて多くの人の目に触れるようになって.....	35
『濁流の子・補遺』の製作.....	35
今後の防災活動への想い.....	37
七 おわりに.....	37

一 はじめに

近年、全国各地で大規模な災害が立て続けに発生しています。特に世界的な気候変動の影響とも言われる台風や前線の活発な活動により、局所的な集中豪雨の発生が増えており、それに伴う河川氾濫や土砂災害が多発している状況にあります。

天竜川流域においても、脆い地質や急峻な地形の場所が多く、断層も多数存在する地域であることから、過去には三六災害をはじめとした大きな災害が発生しています。国土交通省、天竜川上流河川事務所では、河川氾濫や土砂災害発生を防止するため、護岸の改修や砂防堰堤等の整備を進めてきました。しかしながら、施設の整備だけでは災害を完全に防止することは難しく、万が一、災害が発生した場合への備えを進めること、流域住民に災害への意識を高めてもらうことは、重要な課題となっています。

そのような背景もあり、地域にて過去に発生した災害時の様子を伝承すること、そこからの教訓を学び、後世に伝えていくことについても、その大切さが再認識されているところです。

当事務所では、平成二十六年年度より『語り継ぐ『濁流の子』

プロジェクト」として、昭和三十六年に伊那谷にて発生した三六災害に関する写真や資料を収集整理し、公開する取り組みを進めてきました。取り組みのタイトルとなっている『濁流の子』は、三六災害発生時やその後の様子などの体験談を当時学生であった碓田栄一氏が独自にまとめた文集です。

本書では、災害発生時、高校生であった碓田さんが「どのようなきっかけ、理由で体験談をまとめることを思い立ったのか」、また「どのような経過で作文の収集、編集、印刷等を行ったのか」「製作・発刊の過程でどのような交流や反響があったのか」などについて、当手を振り返ってお話しいただいた内容をとりまとめました。

今後、災害に対する人々の理解と防災へのさらなる意識向上が求められるなか、本書が防災教育や災害伝承を行っていく際の参考資料となれば幸いです。

天竜川上流河川事務所

二 三六災害と『濁流の子』

三六災害

昭和三十六年（一九六一年）、台風の接近と梅雨前線の停滞による激しい雨が伊那谷を襲い、伊那谷では一週間で年間平均雨量の三割を超える豪雨（飯田観測所・総雨量五七九ミリメートル（六月二十三日～七月一日））を記録しました。

伊那谷の各地で川の氾濫、土石流、地すべりが発生し、何十年に一度か百年に一度くらいにしか起きないといわれる大災害となりました。家や田畑が土石流に押し流され、土石流とともに無くなった集落もあります。三六災害による死者・行方不明者は一三六名、家屋の全壊・流失・半壊は千五百戸にも及びました。



決壊寸前の惣兵衛堤防
（高森町）

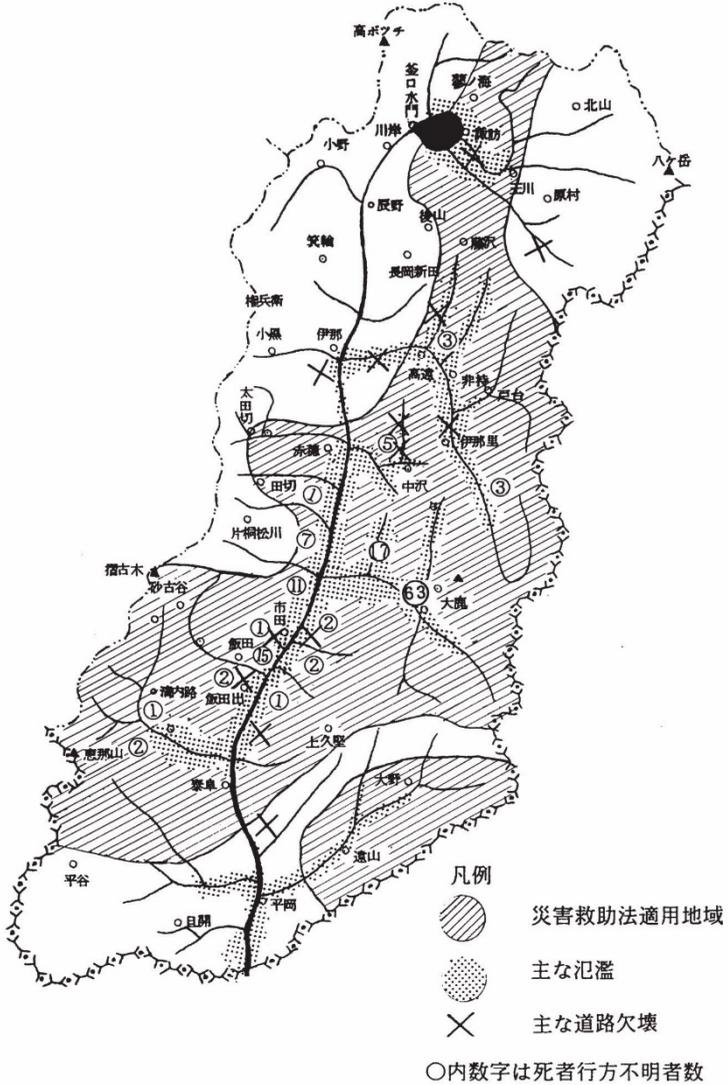


崩落した大西山付近の様子
（大鹿村）



浸水した川路小・中学校
（飯田市）

天竜川流域被災箇所概要



出典：昭和 36 年度伊那谷大水害の気象

(国土交通省天竜川上流工事事務所：平成 3 年 3 月発行)

『濁流の子』とは

- 『濁流の子』は、豪雨災害（三六災害）による被災者の作文集である。
- 編纂者は、当時二十歳の大学生だった碓田栄一さん
- 昭和三十九年十二月、災害後三年を経て、災害当時に書いた作文や、その後の復興や生活の様子についての体験談などを編纂。
- 災害の記録について、約千編、原稿用紙約三五〇〇枚の作文中から編集されたものである。
- 昭和三十九年十二月 ガリ版刷りにて『濁流の子』五百部を独自に発刊
- 平成三年六月 天竜川上流河川事務所が五千部を復刻
- 平成五年四月 天竜川上流河川事務所が『続・濁流の子』を発刊
- 平成三十一年四月 碓田さんが『濁流の子・補遺』を発刊



三 三六災害の発生と被災地受験生の支援

三六災害の記憶

三六災害が発生した当時、私は伊那北高校の二年生であった。住まいは箕輪町であり、大雨による被害も直接は受けておらず、その後も変わらず登校する毎日を送っていた。各地で大きな被害が出ているという情報は新聞などで報道されており、下伊那地域では飯田線も不通になり、実際、伊那北高校へ通学できない生徒もいた。「かなり大きな被害になっているらしい。天竜川の増水もすごいらしいよ」という話が友達の間で交わされて、実際に川の様子を見てみようと、天竜川まで見に行つた記憶もある。

高校受験生を励ます活動

災害による大きな被害を知るにつけ、被災された方たちを応援することが何かできないかという思いが浮かんできた。どうすればいいかと考えているとき、受験を控えた学生たちの中には、家も流れてしまい、勉強道具や参考書なども流れてしまった人たちがいるという話を聞き、「受験生は大変だ。自分たちが中学の時に使つた参考書でも集めて送つたらど

うか」と思いついた。

現在のような、募金活動や災害ボランティアという概念は社会の中に認知されておらず、被災者の元に直接出向くということも考えつかなかつた。当時、高校生であつた私には募金活動を進めることも難しかった。学生としてできることは何かと考え、「心」「友情」を示すことができたかと考えた。そして、「自分たちが高校受験で使つた参考書が残つている。一、二年前のものなので、そんなに間があいておらずまだ使える。使い古しだけどよかつたら使つてもらおう」と思つたのが、この活動の始まりであつた。

まず始めに「中学時代三年生十一月号」（旺文社）を集めた。集めたものの、どこにどのように送ればいいか思いつかず、思案した結果、教育委員会の事務所（上伊那教育会）にお願いすることにした。教育委員会を通じて被災地の高校受験生に送つてもらふことができた。

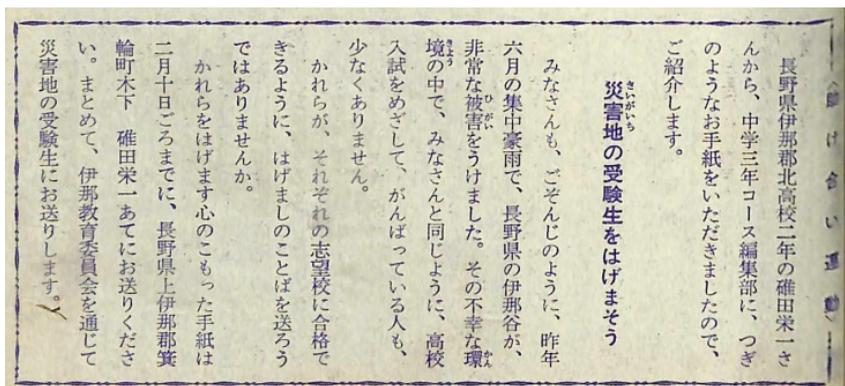
「災害地の高校受験生を励ます運動」と名づけて始めた活動は、「受験の時に使つた参考書で、使用しないものがあったら持ち寄つて受験生に送ろう」、また、参考書だけではなく、やはり激励したいとも考え、「彼らを心から励ます手紙を書こう」という内容で、同じ年代の方たち、あるいは同じ高校受験を目指している方たちから一緒にがんばりましょ

うという激励文も集めることとした。昭和三十七年二月十日までに参考書一五〇冊を送ろうという目標も立てた。

最初は中学の同級生、あるいは中学の知り合いに声をかけた。自分の通う伊那北高校の友達にも声を掛け、またそこから別の友達に声をかけてもらい広げていく形で活動を続けた。私たちの呼びかけに対する反響は思いのほか大きく、日ごとに協力者が増えていった。特に伊那弥生ヶ丘の高校生はクラスメートにも呼びかけるなど積極的に参加してくださった。学校帰りに、何冊かの参考書を持って私を訪ねてくれた時は、ただただ感謝の気持ちでいっぱいになった。

何人かに声をかけるとその人がその友達に声をかけ、またそこから声をかける形で活動が広がっていった。いいことだからやろうとそんな話になったと思う。通信手段の発達した現在と比べると、当時は実際に顔を合わせて話をするので、ある意味では、あまり誤解されることもなく、どういふことをしたいという話が正確に伝わり、大きな広がりになったのではないだろうか。

次に、運動をより広げて全国の高校受験生にも協力を呼びかけようと、旺文社、学習研究社、小学館に依頼文を投稿した。小学館からは賛同の電話まで掛かってきた。



旺文社「中学三年生コース」昭和37年1月号掲載記事

災害地の高校受験生をばけまそり

災害地の高校受験生を励ます心の会

梅雨前線暴雨からすでに五ヶ月。被災地伊那各に年の瀬が近づいて来ました。家を失い、田畑を失った被災者たちは、どんな気持で年の瀬を迎えようとしていくでしょうか。

被害を受けられた方々の中には、来春の高校入試受験生も少なくありません。災害のために進字をあきらめて職場につく人もおられます。また、こうした悪環境にも屈せず、合格、という一言を自さして不屈な努力をしている人々も多数おられます。彼らを、私たちは励ましてやりたい気持です。

私たちも、高校入試の折には先輩から励まされ、努力してきました。先輩や友の暖かい励ましや言葉がどんなにうれしかったか、経験してきました。

私たちは、悪条件の中から立ち上ろうとしている受験生を励ましてやるべきではありませんか。私たちの一行が、彼らにとって大きな力となるので

左記の要領で災害地の高校受験生を励ます運動を行いたいと思います。皆さん、彼らを励ますためにこの運動に加わってください。彼らが専事合格の栄冠を勝ち得ることができるよう、みなさんが一人でも多くこの運動に加わってください。

私たち高校生の心の団結を彼らに与えようではありませんか。みなさんの善い心に期待いたします。

記

一、運動の内容

① みなさんが受験の時に使った参考書で使用しないものがありましたら、格納して下さい。

② 災害地の受験生を励ます手紙。

二、運動の期間、二十七年二月十日まで。

三、参考書、勵ましの手紙は 須にお届け下さい。

四、みなさんからの心のもつた参考書、手紙は上伊那郡教育会を經由して受験生に送ります。

五、この運動をより発展するために是非お友だちにも話して、参加して下さい。さるようたびかけて下さい。

以上

被災中学生に参考書を

高校生の呼びかけに

全国から愛の手あいつく

◇：『集中豪雨で被害を受けた伊那谷の中学生を励まそう』という一◇

◇：『高校生の願いが、最近になって全国な運動に盛り上がり、被災◇

◇：『災地の中学生へは善財品や激励が相づいて寄せられている。◇

昨年十月末、伊那市の伊那教育相談、参考書を要のプレゼントする一方、受験雑誌の発行所等に「被災地の中学生にある」と参考書十数冊が届いた。落出人は「被災地の高校受験を励まそう」の心を、上記の参考書に託してあった。



伊那の参考書

レセントはそ

の後もずっと届けられ、このほど贈り主は岡谷市伊那北高二年、田中一君（トウチウキ）をリーダーとするグループをわかつた。確田君は昨年十月、高校受験にむけて被災地の中学生たちが参考書も十分でなく、受験勉強に苦心しているのをみて、中学時代の友人たちと

「一冊を二百五十冊、激励文十八通、ノート、鉛筆と折ッルを。なお確田君のとうろへ激励三百通が寄せられており、近く、心の会として十回目のプレゼントをする」といふ。

上伊那教育事務所の話 善財の

「こもった高校生の贈りものに被災地の中学生たちは大喜びです。高校にバスで送るのが何よりのお礼とみんな懸命に勉強しています。」

確田君の話 各地の高校生のみなさんから「ッ」と贈り物をおいたとき、自分が励まされてる感じがして、みんなの気持を率直に被災地の中学生に伝えたいと思っています。

協力や受験生への激励の手紙募集を呼びかける文章が「中学三年コース新年号」（学習研究社）、「高校進学中学生の友新年号」（小学館）、「中学時代三年生二月号」（旺文社）に掲載された結果、全国から激励の手紙が寄せられた。被災した受験生宛のものもあったが、私たちの活動宛のものもいた。受験生宛てのものは教育会にお預けし、私たちの活動宛にいただいたものは大切に全部保管してある。

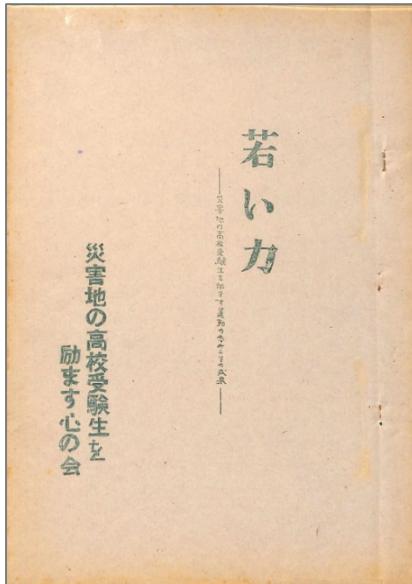
一人で始めた活動であったが、徐々に活動が公になっていった。昭和三十七年一月二十日に毎日新聞社記者が学校に來訪、二十二日には伊那毎日新聞社から電話があった。両紙に掲載され、NHKニュースやラジオでも取り上げられた。新聞やラジオの報道により、活動はクラスメートにも知れ渡り、ホームルームの議題にもなるほどであった。

たとえ一部の人にしろ、真剣に考えてくれたことは嬉しかったし、多くの協力者を得ることが出来たことは、本当に喜ばしいことであった。

最終的には、全国のほとんどの都道府県から支援が寄せられた。運動に協力してくれた人は、全国の中学生、高校生など六百人以上となり、参考書四四九冊、進学雑誌二十四冊、激励文四三〇通、義援金二六〇〇円、ノート五十二冊、鉛筆十二ダース、しおり十三枚、絵ハガキ、習字、折鶴、セータ

ーなど、（女優香山美子さんのサイン入り激励文）などが集まった。

高校受験生を励ます運動が一段落したところで、協力してくださった方々に活動の経緯や成果をまとめて報告することとし、冊子「若い力」を製作した。ガリ版で全文三十二ページほどの資料となり、作成した冊子は、運動に協力していただいた人の名簿を掲載して、お礼として送付した。



「濁流の中の高校受験生」の製作を企画

この活動を通して、災害による被害の大きさを実感する半面、多くの協力者たちの温かい支援の心に触れた私は、災害の苦しみの中から見事進学の夢をかなえた人たちの体験記をまとめ、励ましを寄せてくれた全国の人たちに喜びを伝えようと文集「濁流の中の高校受験生」の出版を思い立った。

高校合格を果たした被災者の方に体験記を書いていただくためには高校合格者の名簿が必要になった。被災地の中学校十校にその趣旨を説明しお願いしたところ、個人情報などが厳しく言われていない時代だったこともあり、名簿を送ってくださった。一連の活動が公に報道されていたことと、この活動の趣旨が伝わったために、学校の方でも理解していただき名簿が送られてきたのだと思う。その名簿を元に一六〇人くらいに作文を依頼した。

作文を書いて送ってくださったのは五十人くらいであった。送られてきたものを、編集、印刷し、協力していただいた皆さんにお礼としてお送りして一連の活動を終わりにする予定であった。しかし、翌年度は私自身が受験生となり、作業は進まず中断することになってしまった。

記録文集「濁流の中の受験生」作成のお願い、

様

伊那北高等学校三年 藤田 栄一

拝啓、青葉の美しい五月半ばを過ぎました。諸君も高校生となつて早一ヶ月半、今ではすっかり高校生になれ、各方面で御活躍のことと存じます。

さて今度、記録文集「濁流の中の受験生」を作成することになりました。

昨年六月の集中豪雨、その惨状は今なお諸君のまわりに残されていることでしょう。恐ろしかった出来事、そして高校受験、諸君にとっては本当につらく、苦しい半年だったことと思います。けれども、諸君はその苦難を乗り越えて今では立派な高校生です。しかしそれには数知れぬ苦労があったことでしょう。

今度作成を企画しました「濁流の中の受験生」はそのうしろ諸君の体験記をまとめるものです。

学校の試験等でお忙しいことと思いますが、どうか左記事項に従つて原稿をお寄せ下さい。

原稿の郵力をお願いたします。

昭和三十七年五月

一、内容 恐ろしかった豪雨、受験をひかえての水害に悩んだこと、全国の災に助まされたこと。水害に打ち勝つての勉強、受験のこと、合格した喜び、等諸君が常用の日から体験したことを、「水害と高校受験」を中心とまとめて下さい。題名自由

二、原稿の長さ 四百字原稿用紙四枚以内

三、切 六月十五日(金)

四、送り先 上伊那郡筑前町木下 藤田 栄一

五、全国から寄せられた援助の手紙がありましたらお貸し下さい。

六、原稿と共に左の用紙を忘れずに同封して下さい。

切りとり線

氏名	姓	名	性別	男	女
住所	住	所	出身校	高校名	高等学校
				科	中学校
題名	字	数	字		

被災生徒の作文

高校三年の終わりに、伊那北高校生徒会誌「薫風」に『濁流の中の高校受験生―伊那谷高校受験生の記録―』と題して文章を寄稿した。企画段階で中断し集めたままになっていた被災体験者の作文のいくつかを紹介し、三六災害での現状をまとめた文章である。掲載した作文を紹介する。

「薫風」伊那北高校 生徒会誌より（昭和三十八年三月）

■学校もそれから一週間休みとなった。受験を控えている私たちにとって、この休みほどつらかった事はない。ただ気ばかりあせった。それでも友達に励まされ、励まし合った。他県の方々にも手紙で励まされた。それが私たちにとって非常にうれしくもあり、温かい気持ちが身にしみてわかった。と同時にしつかりやっていかなくは、こんな事で負けるものかという強い気持ちが養われた。（豊丘中学校卒業生）

■なんといつても中学生生活最後の年に、あんな水害を受けたことが大きなショックであり、二十日間の臨時休校で勉強が遅れ、それが又悲しかった。時には先生からお説教をされて、下を向く人もいた。自分でも時々受験をどうしようかとむっ

つりしてしまう時があった。災害のせいもあつたかもしれないし、勉強がなかなか手をつけにくくて困った。（大河原中学校卒業生）

■災害にあつてからの毎日毎日が悪夢のように過ぎ去っていった。その頃の私の勉強態度は他人よりもはるかに差がついてしまった。教科書もノートもみんな流れてしまったのだ。そう思うと悲しくなってくる。（豊丘中学校卒業生）

■あの土砂崩れで田も畑も失ってしまったので、これからどうやって生活するのか、それを考えると進学という言葉が恐ろしいのだ。父母は「一生懸命勉強しろ。高校の学費くらいなんとかする」と言ってくれた。この時の気持ち。しかし、本当に自分は高校へなど行って良いのかと不安であつた。（大河原中学校卒業生）

■勉強していても時には考えることもあつた。長男であるおれが、今、この場合高校へ行っても家でその学費が出るだろうか。父にしても母にしてももう歳だ。下には中学になる弟がいる。こんなことも考えてみた。父も母も、「どうしても進学させてやる」と言ってくれるので、そんな時、腹の底か

ら大きなフアイトがわいてくるのだった。(中川東中学校卒業生)

■勉強がなんとか落ち着いて出来るようになったのは一月頃で、もう遅い頃であったが、僕たちと同じように水害にあった人達はいくらでもいて、みんな受験勉強に取り組んでいるのだと考えると、僕も負けられなかった。(中沢中学校卒業生)

■冬休みは校長先生が県へ頼んで補充授業を行うことを許してもらい、毎日二時間ずつやってくれた。その時間数と十日間遅れた時間数と比べてみて、もう少しだなどと言いながら、水害前より真剣だった。先生方も冬休みには休みたいのに、一生懸命やってくくださった。(川路中学校卒業生)

■志望校を合格できたこと。それは全国の方たちの励まし、応援や先生方が一生懸命尽力くださったこと、それと僕たち受験生の「なにくそ」という頑張りからだと思う。水害から得た貴重な有意義なものとなるよう、それをこれからばかり知れないほどあるであろう困難に打ち勝って強く生き抜こう。(川路中学校卒業生)

■災害でなくなった霊に報いることができ、さらにあの時、激励の手紙や慰問品を送ってくださった全国の人たちにも、恩返しができたような、広いおらかな気持ちになった。(大河原中学校卒業生)

■私ばかりではない。どの友達もが他校に負けたくないと思力しました。水害のために進学できなかった友達もいます。「でも立派な社会人になります」とはりきって就職しました。私も、全国の人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。社会のために、少しでも良いことをしようと思掛けています。そして、一日も早く、災害のない平和な社会を作りたいと思えます。(大河原中学校卒業生)

■この水害は私たちにとって忘れてしまってもよいことであると思うと共に、決して忘れてしまっはいけない事であるとも思う。水害に打ち勝って勉強し、得たあの高校合格の勝利、あの喜びをいつまでも忘れずにこれからもなお一層頑張らなければならないと思います。(中川東中学校卒業生)

四 『濁流の子』の製作

「濁流の中の高校受験生」を再考

大学に進学後、全国の高校受験生からいただいた体験文をまとめる必要を感じていた。遅々として進まない被災地の復興、続く被災者の苦しみなどの状況を知ると、何かしなくてはとの思いが高まり、企画の再スタートを切ろうと考えた。

やがては、被災地の人々も、たくましく立ちあがる日が来るだろう。そして、このような大被害を受けた苦しみを忘れ去らないまでも、記憶の隅に追いやってしまうような日が来るのではないだろうか。「災害は忘れたころにやってくる」ともいわれる。伊那谷が受けたこの痛手を、いつまでも忘れないように、また、この災害から、みんながどのようにして立ち上がったかを、いつまでも残る記憶としておく必要があるのではないかと考え、この文集編集への思いを駆り立てていった。

当初は高校受験生の体験記をまとめる予定であったが、それだけではなく、被災した子供たちの声を広く集めてまとめたいと企画内容を変更した。

まずは、災害の体験記という形で各学校が出していた文集をお借りしてその中から選んでまとめようと思い、すぐに得意のガリ版を切って被災地の学校へ「被災した子どもたちの作文を送ってください」と依頼をした。ただ、なかなか思うように協力は得られず一年が経ってしまった。

そのような経過もあり、本格的に『濁流の子』として製作を始めた時には災害発生から三年程が経ち、その間に災害復旧作業も進んできていた。そのため、災害を体験された方々が、いろいろな方と接しお世話になり励まされてきたか、感謝しているか、これからどうがんばっていきたいと思っているかという前向きな内容も含め、伊那谷の災害を伝える文集としてとりまとめたという気持ちになっていた。

このように、最初は単純に被災した学生たちの体験文集をとりまとめて、協力者へお礼として送ることを考えていたものが、三六災害全体に関する文集としてまとめるという大きな企画となっていた。正直言って当初から綿密な計画があったわけではなく、まとめることが嫌になったり、休んだりもしながら、時間の流れのなかで、最終的な文集の構成が形作られていった。

製作への思いを強くしたラジオ放送

本格的に製作に取り組み始めた当初、反応はほとんどなかった。取り組みの難しさを感じ始めた頃、ニッポン放送にて「その後の伊那谷をゆく」（特番一週間（放送五日間）放送）という被災地の現在を紹介するラジオ放送があった。

そのラジオ放送にて被災地の復興がなかなか進んでいないという話を聞き、災害を忘れないようにするために、何らかの形で自分もがんばらなければならないという思いが高まり、文集製作への決意を新たにしました。

放送内容にとっても興味を持った私は、番組の取材者の川内通康氏を訪ね、実際の被災地の様子や復興の状況を聞くことができた。自分では被災地を巡ることはなかなかできなかったため、現地の様子を詳しく聞き、災害の様子やその体験などについて伝えていくことの大切さを再認識した。

ラジオ放送の内容

☆放送日時 昭和三十八年六月七日（月） 七回放送

☆放送内容・主旨

昭和三十六年六月、中部日本一帯に降り注いだ集中豪雨は、緑の伊那谷を駆け巡る天竜水系の水かさを増し、「あばれ天竜」の異名そのままにあふれ出た鉄砲水が山を削り、田を浸し、人家を押し流した。

あれから早くも二年。台風二号は幸い本土に上陸することなく過ぎ去ったとは言うものの、このところ連日降り続く雨を見つめる伊那谷の農民の表情は暗い。中でも一昨年災害で五十五人に上る死者を出し全村壊滅的な打撃を受けた大鹿村では、この長雨でまたも地すべりの発生が続出している。昭和三十六年の災害激甚地下伊那郡大鹿村を中心に駒ヶ根市、飯田市、生田部落、喬木部落、松尾部落などを訪ね、巨額の費用を投入し今なお続けられている復旧工事の効果、被害地での教育、農業再編成の行方、治山、治水工事のあり方、集団移住者の生活、そして災害孤児のその後を探りながら「災害国ニッポン」の宿命を分析する。

『濁流の子』の製作開始

作文の収集

『濁流の子』の製作にあたり、本格的に作文の収集を開始したのは昭和三十八年になってからである。当時、私は東京の大学に通っており、長野を離れていたため、被災地の学校への依頼などの連絡は、ほとんどが郵便を用いていた。当時の封書用切手代金は十円であった。依頼文などは、すべて手書きで何十通も書いた。

たくさんの手紙を書き、作文の提供依頼を行っていたが、それだけではあまり作文は集まらなかった。そのため、直接現地に向いてお願いをすることにした。現地には電車で行き、あとはバスか歩きで移動した。復旧されているところまでしかバスが通っておらず、それより奥の地域については移動が困難だった。そのため、被害の大きかった地域には出向いておらず、災害の爪痕をあまり目にすることはできなかった。また、復興がどの程度進んでいるのかもわからなかった。

昭和三十八年五月一日

被災地の小中学校九十校に原稿依頼

夏休み

原稿の依頼状を作り五十校に送付

昭和三十八年九月二十五日

被災地の市町村役場、教育委員会を訪問し依頼

大災害を経験した児童生徒の精一杯の叫びを、そして災害の不遇にもめげず強く生きる子らの姿を一人でも多くの人に伝えようと始めたことだが、当初は市町村や学校にお願いしてもなかなか相手にしてもらえず、昭和三十八年夏頃にはまだ反応は芳しくなかった。製作を断念しようかとも思った時期である。

その後、半年間にわたって、粘り強く数度の依頼や訪問を行った結果、熱意が通じたのか、昭和三十八年秋以降になって、徐々に作文が集まり始めた。

集まった作文

昭和三十九年一月までに、約千点の作文が集まった。その多くが学校からお借りしてきた災害記録文集であり、書き写して返却する必要があった。役所や学校を通じて作文の提供

を依頼してお借りすることができたが、今からすると、当時は、まだ個人情報などは厳しくなかったため、借用が可能だったように思う。できるだけ早く返却するため、まずはとにかく書き写す作業が続いた。当時はコピー機がなかったため、約千点の作文について、鉛筆で原稿用紙に書き写すという作業を行った。

作文の他には、伊那谷十六 市町村すべてから災害報告書や被害等をまとめた資料、被災者名簿などが届いた。

家が流された被災時の作文だけでなく、別の地に移ってそこでがんばっているという作文を集めるため、移住者名簿の提供も市町村に依頼したところ、その名簿も届いた。

また、災害後の復興の様子などを書いていただくために市町村にこういう方を紹介してほしいとお願ひしたり、先生に紹介いただいたりしながら作文の依頼を続けた。

集まった文集などは、その段階ではどの作文を載せるか、構成をどのようにするかなどは判断できなかったもので、とりあえず、すべての作文を書き写した。書き写しは大変な作業であり、東京の友達にもお願ひしたが、スタート当時から共感し、協力してくれていた伊那谷の中学高校時代の仲間が中心になって手伝ってくれた。書き写した原稿は、なんと原稿用紙三五〇〇枚ほどにもなった。

編集・製本作業

構成内容の検討、編集

本の構成については、実際に集まった作文に目を通しつつ、受験生に限らず、被災された方の体験、支援に対する感謝、これからの目標や夢などを組み込んだ、災害による被災からその後の復興にかけての記録として作成したいと思った。復興の経過などについては、新たに依頼し提供いただいた原稿もある。

このような方針のもと、文集の組み立て・ストーリーを考えつつ作文の編纂を行った。作文を選ぶ際は、災害について、具体的かつ広範囲な内容が伝わるように注意して選択した。

原紙切り

多数の作文に目を通しつつ、その構成の検討を続け、昭和三十九年六月十日ごろになって、原稿の選択や編集が終了した。

その後、考えた構成をもとに、謄写版（ガリ版）にて印刷

を行うための原紙の作成に入った。

原紙切りとも呼ばれるこの作業は、「ロウ紙」と呼ばれる原紙を、金属製のヤスリ板の上に載せ、先の尖った棒を木の軸に固定した鉄筆で強く押し付けて書いていく作業である。鉄筆でヤスリ板に押しつけられた原紙のワックスが、ヤスリ目の形に削られてインクが透過する微細な穴ができていく。謄写版による印刷では、この原紙を謄写器に固定して紙を置き、インクをローラーにて圧着させることで、原紙の微細な穴を通ったインクが紙に転写される仕組みである。

ガリ版自体は小学生の頃から書いていて、クラスの文集を作るなど、慣れ親しんでいた。ガリ版の機械は、中学生の頃に親からもらったお小遣いで買った自分専用のもを持っていった。その当時、興味のあった考古学の仲間で研究の発表や新聞発行を行っていた。

今の時代なら、原稿を後からいくらでも直せるが、この頃は間違えたら直せない。修正液もあるがうまく直せない。ガリ版刷りは趣味の一つであったと思う。

六月に、完成のページ繰りを逆算しながら、八十枚の原紙を二週間で書き上げた。この期間、一日の生活がこの仕事を中心に動いている様に思われたほどであった。仕事が進むにつれて腕や指の痛みを覚えたが、休まず作業を続けた。学

校にも最低限通っていた状態で、生活の中心が製作活動となっていた。

このころ住んでいた下宿は三畳一間、台所とトイレは共同で、お風呂は近くの銭湯に通っていた。昭和三十年代後半には、そんな学生が多かった。下宿の人との付き合いはほとんどなかった。

製作作業は、この下宿で行っていたが、三畳の部屋で紙をいっぱい広げての作業は大変だった。

印刷・製作・作業

七月になって印刷を始めた。深夜、印刷の音を出して隣室に迷惑をかけてはいけないと思い、作業は朝と夕に集中して行った。夏場の作業であったこともあり、暑さで原紙のロウは溶け、むっとした室内で連日作業を続けたところ、ついには夏ばてでダウンしてしまった。そのため、夏休みは帰省して養生を取ることとなった。

東京に戻り、十月八日より印刷作業を再開した。

二百ページの作文をB4用紙にB5版二ページ分を刷り、両面印刷して四ページ分で一枚の用紙が出来上がる。それを二つ折りにし五十枚分を組んで、一連の作業となる。裏表の

ページ組に注意しながら印刷を続けた。

印刷作業では、印刷用紙を買って運ぶだけでも一苦勞であった。一束千枚の紙の束だけでも重いので、一束ずつしか持って帰ることができず、何度も店に通うこととなった。

印刷作業では、インクが濃すぎると裏映りしてしまったり、原紙が切れてしまったりするため、手加減が大事となり、作成した原紙からは、五百枚の印刷が限界であった。

十一月には本編の印刷が終了した。最終的に五〇五部を印刷して、そのうち五部を紐綴じにて仮製本した。

仮製本した文集を長野県知事、上伊那、下伊那の地方事務所と旺文社に送付し、序文を書いていただきたいとの依頼を行った。序文の依頼を行ったことで、新聞でも取り上げられることとなった。

今から思えば、国の事務所として、河川を管理、整備している天竜川上流工事事務所にも依頼できればよかったが、当時はそのような組織があることを知らなかった。

依頼した序文が届いてから、目次と序文の印刷を行い、すべてが整うこととなった。



ガリ版刷りに使う機材



「高2時代」
昭和40年2月1日発行
旺文社

濁流の子を近く刊行

伊那谷出身の大学生の手で

三年前の豪雨禍つづる

三十六年の極雨前線豪雨の被災地「伊那谷の子」もまたその体験をつづった文集「濁流の子」が、ちかく伊那谷出身の大学生の手で刊行される。このほかに依田下伊那地方事務所長で、序文を書いてほしいとの依頼の手紙をえて、文集の草稿がおくられてわかったものだが、それによると、災害の夜の恐ろしき、帰らぬ友、肉親へのよびかけなど、子どもたちが見聞き、体験したままなまじい当時のもようがおさめられている。

この文集は、上伊那箕輪町出身の明治大学二年、雅井栄一君らのグループが計画、子どもたちの体験した災害のもようを、伊那谷の人たちとあなたにかい支援助の手をさし、のべてくれた人々に知ってもらいたいというねらい。伊那谷の小、中、高校生などのつづった作文六十五編、詩十二編がおさめられている。約百頁、十二月中に刊行する計画で、資金の五万円ほどは篤志家からの寄付をつのり、伊那谷の学校、役場や災害の復旧に協力した関係者に配布したいという。

文集の内容は、当時の記録とともに苦難をのりこえて受験に合格した喜び、明るい復旧のようす、なき友へ呼びかけることば、災害で孤児となった子どもたちの生活など、当時の作文と、現在の復興した伊那谷をつたえるもの。祖父母と兄を一夜にして失った小学校一年生のことばもあり、涙をさそう作文ばかり。ふたたびこのような



惨事をくりかえすな」と結んでいる。依田所長も「読みおわってから、当時のもようが思い出されて頭からはなれない。地方自治にたずさわる者に示唆を与えている。伊那谷の歴史にのこる記録となるだろう」と、さっそく序文をおくり、文集の発行に協力するといっている。

十二月に入って文集製本の準備を始めた。三畳の部屋では手狭であったため、事情を説明して、下宿の大家さんに協力を依頼した。

大家さんから特別に一部屋借りることができ、そこで印刷した原稿を広げて作業した。作業に共感してくれた大家さんから下宿の大学生にも声をかけていただき、印刷されたB4サイズの紙を二つ折りにし、ページを間違えないように順に整える作業を皆の協力のもと行なった。合計二万八千枚分を折りながら丁合ひする作業を三日間で行うことができた。

製本作業を自分で行うことは難しかったため、製本屋にお願いすることにした。製本屋は電話帳で調べて、問い合わせをした。お願いすることになった中野の製本屋は個人の町工場で下宿先からは遠かったが、趣旨に賛同してくれたご主人が、わざわざ原稿を取りに来てくれ、注文してから一日で製本して納品してくれた。製本代は片道運賃を含んで九千円（領収書あり）であった。当時は、中華そば一杯が五十九円、大卒公務員の初任給が一万九千円程度の時代であり、大きな出費であった。製本代を含めた製作の費用については、作文を送ってくれた高校生の中で、資金の一部にとお金を同封してくれた人もいたほか、一部賛同してくださる方からの寄付もあった。とはいえ、それだけでは足りず、残りのお金は自

分で準備した。ただ、製作に時間を割いていたので、資金を貯めるためのアルバイトをする時間もなかなか取れず、小遣いや食事などを削って資金にあてた。

発行日は、私の二十歳の誕生日(十二月二十三日)となった。



製本作業の領収書

製本された文集は、配布前に学校への届け出を行った。当時は、学生運動の真ただ中で、ビラをはじめ配布物については、事前に学校への届け出が必要な時代であった。学校の学生課に一冊持って行き、届けを出すと、『濁流の子』についての情報は既に伝わっていたようで、担当者には「話には聞いて知っていました、届け出がないと困ると思っていた。届が出て安心しました」と言われた。学校でも話題になっていたのかと驚いたのを記憶している。

市町村、教育委員会、学校、協力者等に四五〇部を配布した。残りは五十部であったが、新聞掲載の折に希望者を募ったところ、三百通余の郵便が届いた。このため、抽選で三十人の方のみ配布した。抽選に外れた方にもお詫びの返信をしたが、その作業も大変だった。

残りは二十部であったが、その後の活動で配布することがあり、現在手元に残っているのは教部のみである。

文集の序文を下伊那地方事務所長に依頼したことがきっかけで信濃毎日新聞の記事となった後、多くのメディアで取り上げられることとなった。文集が完成した時には、新聞九社（読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、産経新聞、信濃毎日新聞他）、雑誌一社に掲載され、大きな反響があった。

活動の初期に、参考書や激励文の募集記事を掲載していただいた旺文社では、「高二時代」という雑誌に物語風に仕立てた記事で紹介された。

「母と弟が死に、投げやりになっていたが、あれを読んで勇気が湧いてきました」という高校生からの手紙も届いた。色んな形で礼状が届き、新聞を読んだ感想や反響は、この取り組みの大きな足跡でもあるので今でも大事に保存している。

五 『濁流の子』製作のその後

復刻版の製作

平成三年（一九九一年）当時の天竜川上流工事事務所を中心に、伊那谷三六災害三十年行事実行委員会が組織され、記念式典が計画された。その際、災害の記録を伝えるものとして『濁流の子』が委員会の目に留まり、文集の中から抜粋して資料を作ったかどうかという話になったようだ。事務所から連絡をいただき、「資料として役立てていただけると、喜んで提供しますよ」と返事をしたのが復刻版作成の発端であった。

不思議な縁であるが、『濁流の子』に掲載された作文を書いた本人が、ちょうど事務所の砂防調査課に在籍されており、話が出たのかもしれない。当時の所長が手書きの『濁流の子』を見て、「こんないい記録はなく、後世に残すべき資料だ。限定印刷されたものしかないのです、もう一度文字起こしをして活字にするのではなく、当時のそのままを残したい」と、相当こだわりの持った支持してくださり復刻していただくことになったようだ。手作業で製作した『濁流の子』であっ

たが、情報のデジタル化という時代の流れも受け、当時そのままの味を大切に復刻していただけることになったわけである。

当時は若さに任せて突っ走っていたように思う。三十年前の文集が直筆のままの姿で復刻されることになり、正直なところ気恥ずかしい思いもあったが、当時の記憶が薄れていく中で、子どもたちが素直な気持ちで書いた災害の恐ろしさを書いた作文を改めて読み返すことで、当時の悲惨さを感じ直し、災害を知らない人たちにも災害の恐ろしさを知ってもらえるのではないかと思った。そして、それが治水・砂防事業の必要性の理解と防災知識の普及啓発につながっていくのであれば、『濁流の子』を製作した意味があると考えるのではないだろうか。

復刻にあたって、またも新聞、テレビで大きく報道されることになり大きな反響をいただいた。一般にも無料配布されたため、当初三千部の発行だったが、急遽二千部を追加したと聞いている。こうして災害から三十年にして、再びスポットが当てられ、多くの人に読まれることになった。

復刻版完成の翌年（平成四年）、建設省などが主催する「土砂災害防止月間推進の集い」全国大会において、土砂災害防止の啓蒙に貢献したとして建設大臣賞をいただくことになった。

伊那谷に二度と災害を起してはならない、忘れてはいけな
いと、三十年式典で文集を復刻していただき、災害後三十年
を経て文集が活用され、その上立派な賞をいただけることにな
った。しかしこれは私一人の賞でなく、伊那谷の被災者に
対する賞だと考えている。『濁流の子』が多くの方の防災意
識に貢献できるのであるならば、それこそが喜ばしいことな
のではないだろうか。

平成四年（一九九二年）六月二十九日に、「伊那谷治水と
防災の日」の一環として講演会が催された。その席で、私も
講演をすることになった。

『濁流の子』を作った当時から、この文集の存在価値は何
なのだろうという疑問をもっていたが、復刻版が幅広く読ま
れ、災害を知らない人たちに語り継がれる一つのツールにな
れたことは意義深いと感じるという話をさせていただいた。

天竜川上流工事事務所長からは「事務所においても災害を
防ぐ努力が続けているが、三六災害と同規模の洪水が来たら
再び大きな災害が起こらないとも限らない。今後も何らかの

警鐘を鳴らしていかねばならない」との話があり、災害の教
訓を時代に語り継ぐことの重要さと、治水・治山事業などへ
の理解、支援を訴えられていた。

確田さんに建設大臣表彰

箕輪、土砂災害防止功労で

伊那谷十六年災害防止功労者として、伊那谷の復興を促す書生体験
年行委員会委員に昨、那智輪野本、倉社長、
年復刻された同書復刻後の功が九日、富山で贈られた
文集「濁流の子」伊那谷、土砂災害防止月間推進大会
の記録の原簿製作で、地産住民に土砂災
害の記録の原簿製作



建設大臣表彰を受けた確田さん

害の恐ろしさを知り、策
事業の重要性を説いた報
が褒められ、土砂災害防止
功労者として建設大臣表彰
を受けた。

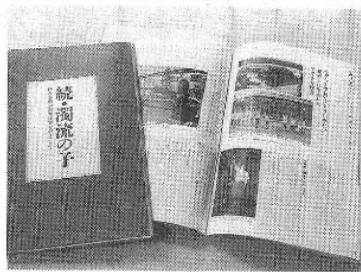
確田さんは昭和二十九年
十二月、三六災害にひび
き、立派な功績があり、立
派に褒めて賞状を授けら
れた。多くの功績を知
らなければ、と同僚
五回をくり、関係者
に紹介した。死者三六
人、負傷者三六、土砂災害防止の功績は
直務員として伊那谷の
中心に立っていた。七十八
歳の文章と、災
害の復刻を手供した作
文で贈った文集は、同、大
天竜川上流工事事務所
長に贈られた。

復刻版は原本の状態を再
現しようと、当時の原
稿の本文のままに描
き、復刻して一般の人
に読んでほしいと願
っていた。

『続・濁流の子』の製作

平成五年、天竜川上流工事事務所において、『濁流の子』の続編として『続・濁流の子』を企画製作された。これは、当時の被災者が苦勞しながら災害から立ち直っていく姿をまとめたもので、当時の災害文集『濁流の子』に掲載できなかった作文、その後の復興の様子、当時の『濁流の子』達を集めた座談会などを掲載した。災害の写真も数多く盛り込み、①全国からの救援 ②教育の灯は消えず ③新たな出発 ④災害から三十年など、悲劇の実態とともに、両親や兄弟、家を失った執筆者たちが歩んだその後の姿をまとめたものとなった。

座談会では、「一瞬の山津波で、母、祖父母、兄がなくなつた」「人と会うと『よく生きていたね』という言葉が第一声に出るほどだった」など、当時の災害のすさまじさが当事者の声で伝えられている。また、「全国からの励ましの手紙、品物、義援金にも随分助けられた」「匿名で何年もの間クリスマスプレゼントを送り続けてくれた『あしながおじさん』もいた」と、数々の支援への感謝も改めて綴られている。



発行された三六災記録文集「続・濁流の子」

三六災記録文集 『濁流の子』の続編発行

駒ヶ根 座談会、体験文加え

三六災記録文集『濁流の子』の続編が「ほく、駒ヶ根市」のタイトルで千工事務所から発刊され、学校に配布した。

谷昭和「三六災の昭和三十三年後の昭和三十三年の三六災」の続編が「ほく、駒ヶ根市」のタイトルで千工事務所から発刊され、学校に配布した。

「三六災」は、三六災の記録が薄れつつある中で、災害の恐ろしさ、防災に対する認識を深めてもらうと企画。被災した『濁流の子』八人が座談会を通して、悲しみや苦しみを乗り越えてこれまで立ち直った感を振り返っている。のほか、前編に掲載されなかった体験文十一を新たに加え、ま

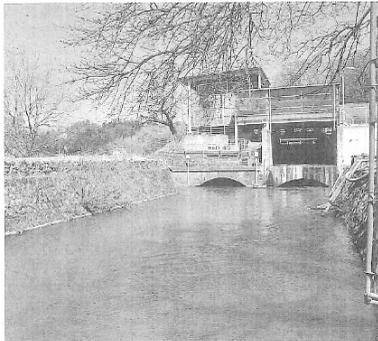
左写真を無償に使用して被災と復興の様子を紹介。B5判、二十九ページ。問い合わせは同事務所(電話0265・82・325)へ。

長野日報

平成5年4月25日(月) 掲載記事

伊那谷遺産31件追加

天上 出版物「濁流の子」も選定



伊那谷遺産リストに入った
駒ヶ根市の大久保発電所

国土交通省天竜川・流河川事務所の「人と暮らしの伊那谷遺産プロジェクト」選定委員会（委員長・笹本正治信州大学副学長）は18日、第3回合会を駒ヶ根市の同事務所で開いた。100選を目指して選考を進めている伊那谷遺産リストの第3弾として、駒ヶ根市東伊那の「大久保発電所」や、出版物「濁流の子」伊那谷災害の記録」など31件を追加選定し、公表した。（倉田高志）

上伊那関係は14件、別表で、電源開発に挑んだ先人の情熱に触れ合うことのできる遺産には、天竜川本流にダム建設した発電所の第1号として大久保発電所を取り上げた。

「三六災害の教訓を記録した「濁流の子」伊那谷災害の記録」を災害教訓伝承活動のシンボルとして、防災に対する意識を効果的に後世に引き継ぐ遺産として選定した。

人と暮らしの伊那谷遺産プロジェクト追加選定リスト

（上伊那関係分 ※は重複）

土木工学的な工夫を重視したグループ	
豊和ダム	伊那市長谷
「防災に対する意識」を効果的に後世に引き継ぐことを重視したグループ	
「三六災害」に学ぶことができるもの	
濁流の子～伊那谷災害の記録～（出版物）	
「自然環境に適応してきた先人の足跡」を効果的に後世に引き継ぐことを重視したグループ	
伊那谷特有の田切地形に適応してきた先人の足跡を体感できるもの	
※太田川川の井筋	駒ヶ根市、宮田村
※千人塚公園蔵ヶ池	飯島町七久保
水害や土砂災害に適応してきた先人の足跡を体感できるもの	
お志茂の水よけ	中川村片桐
日向澤砂防堰堤	飯島町七久保
「水の恵みとふれ合うことができる先人の足跡」を効果的に後世に引き継ぐことを重視したグループ	
電源開発に挑んだ先人の情熱とふれ合うことができるもの	
小黑発電所	伊那市伊那
大久保発電所	駒ヶ根市東伊那
利水開発に挑んだ先人の情熱とふれ合うことができるもの	
西天竜幹線水筋流木の階段工（川原のそばん池）	伊那市小沢
※太田川川の井筋	駒ヶ根市、宮田村
※千人塚公園蔵ヶ池	飯島町七久保
「文化の交流に関する先人の足跡」を効果的に後世に引き継ぐことを重視したグループ	
人々の暮らしを支えた橋の歴史を振り返ることができるもの	
虹橋	伊那市高遠町～美濃
伊那谷橋	飯島町東寶輪～中寶輪
北の麻橋	宮田村、駒ヶ根市
人々の暮らしを支えた森林鉄道の歴史を振り返ることができるもの	
三津川の森林鉄道跡	伊那市
人々の暮らしを支えた峠の歴史を振り返ることができるもの	
中菅峠	飯島町

プロジェクトでは過去に伊那谷で行われた土木や、暮らし、自然などに基づいた先人の足跡を「伊那谷遺産」に選定。防災教育や地域振興に役立て、治水や自然災害の歴史を効果的に後世に引き継いでいく。

委員会では伊那谷遺産の認知度を高めるための活用方法も意見交換。参加型プロジェクトとして伊那谷遺産を巡るガイドツアーの可能性も検討した。伊那市立図書館の平賀研也館長は地域の情報資産の共有と活用について話題提供し、「高遠がらり」プロジェクトで構築した機密情報端末用の応用ソフトをツールに伊那谷広域での電子情報の共有財産化を提案した。

語り継ぐ『濁流の子』プロジェクト

『濁流の子』の伊那谷遺産への選定と並行して、天竜川上流河川事務所では、三六災害から半世紀以上が経ち、災害経験者が高齢化の中で、災害の記録や教訓が風化していつてしまう前に、正確に伝承していくことの必要性が課題として挙げられた。

天竜川上流河川事務所では、かねてから収集していた災害に関する情報をデジタル化して一元管理する必要性も検討されており、それらの情報がオープンデータとして一般公開されることにより地域の防災力向上に役立つのではないかという検討も進められた。

そこで、天竜川上流河川事務所、天竜川総合学習館「かわらんべ」、信州大学附属図書館によって、災害体験の伝承や防災意識を高めることを目的として、災害記録などの資料を収集整理し、電子情報としてウェブで公開することという取り組みが進められることとなった。

そして、その取り組みの象徴として『濁流の子』が取り上げられ、「語り継ぐ『濁流の子』プロジェクト」という取り組みが始まったのである。

プロジェクトの立ち上げに際しては、伊那谷遺産選定委員

の委員長でもある当時の信大附属図書館長・笹本副学長のコメントとして「防災事業において、ハード面だけではなく、ソフト面での地域の防災力向上に向け、日本のモデルとなる画期的な取り組みにしたい」という話があった。

信大附属図書館は、「語り継ぐ『濁流の子』プロジェクト」を始めるにあたり、一般の方にも意識を高めていただきたいとのことでウェブ公開の取り組みに対して基金を設け、寄付金の募集が行われた。『濁流の子』が、災害記録として節目、節目で多くの方に取り上げられ、認められてきた変遷を考えると、「災害伝承として何らかの形で引き継いでいっていただきたい」という思いもあり、寄付という形でこの取り組みに賛同させていただくことにした。大きく取り上げられるとは思っていなかったのだが、信大附属図書館からは感謝状をいただくことになり、気恥ずかしい思いであった。

笹本副学長（当時）からは、「三六災害から半世紀以上たち、知恵や教訓が風化する恐れがある中で、地域全体で教訓を伝承する取り組みを進めるための取り組みに対し、支援が得られ、ありがたい。この取り組みが多くの人に活用され、役立てていただけるようになると嬉しい」とのお言葉をいただいた。

『濁流の子』デジタル化

新年度からプロジェクト委発表 保存計画

「人と暮らした伊那谷遺産プロジェクト選定委員会」は三日、駒ヶ根市の天竜川上流河川事務所で、一九六一（昭和三十）年夏、伊那谷に甚大な大雨

被害をもちつた三六災害で、被災者が所有する写真や本など、駒ヶ根市を、デジタル化して保存する計画を二〇二四年度から開始すると発表した。（札木 忠）

計画は、「三六災害の子、プロジェクト」と命名。飯田市の天竜川上流河川事務所が資料「濁流の子」にちなむが、当時の写真や映像、語り継ぐ「濁流」像、音声などを収集

された。また、松本市の信州大付属図書館で、デジタル化した資料の保存と公開を行う。計画期間計九十八件になった。

間は新年度から五年間。委員長の笹本正治・信州大副学長（日本史）は、「二つの機関が連携することで、ソフト面からの防災を進めていきたい」と話し、



「ソフト面からの防災を進めていきたい」と語る
笹本委員長。駒ヶ根市の天竜川上流河川事務所で

災害の記憶を次世代へ

災害に対する知恵や教訓を後世に伝えていくための取組を進めています。

過去の災害に関する情報を防災教育にご活用ください。

濁流の子プロジェクトのご紹介

天竜川上流河川事務所では、天竜川総合学習館かわらんべ、信州大学附属図書館、有識者などと協力して、後世に引き継がれずに散逸や風化の恐れがある災害に備えるための知恵や教訓などを示す情報資源を収集及び整理し、オリジナル資料などを収蔵するとともに、劣化しないデジタル情報で記録して、公開することを目的とした取組を進めています。



デジタル情報のインターネット上での公開

信州大学附属図書館などにより管理されるホームページ「語り継ぐ“濁流の子”アーカイブス」を通じて、インターネット上で三六災害等に関する資料や写真などを公開しています。



▶「語り継ぐ“濁流の子”アーカイブス」
URL : <http://lore.shinshu-u.ac.jp/>



天竜川総合学習館「かわらんべ」でのオリジナル資料などの収蔵・公開

天竜川総合学習館かわらんべ（長野県飯田市川路7674）に設置する「語り継ぐ“濁流の子”文庫」に、「濁流の子」を含む三六災害等に関連した図書や写真などを収蔵し、公開しています。



天竜川総合学習館かわらんべ 図書室

【濁流の子】

1961（昭和36）年6月下旬に伊那谷を襲った豪雨災害「三六災害」。「濁流の子」はその災害を目の当たりにした小学生、中学生、高校生らの作文を集め、1964（昭和39）年に発行された冊子。確田栄一さんが個人で編集作業に当たった。文集には当時の学童、生徒自身の言葉で災害の恐ろしさ、友人を失った悲しみ、災害で家や田畑を失った状態での不安な高校受験、見知らぬ人々からの励まし、復興の様子などが綴られている。

天竜川上流河川事務所 ・ 天竜川総合学習館かわらんべ ・ 信州大学附属図書館

語りつく
“濁流の子” アーカイブス

HOME 濁流の子 地図から探す 資料から探す

デジタル版
濁流の子 伊那谷災害の記録

1961（昭和36）年に伊那谷を襲った二六災害（上野実吉と大黒親な河川民謡）に被災した小中学生の当時の思いを綴った作文集を無料でご覧いただけます。なお、本アーカイブスでは、公開するに当たって執筆者の承諾が得られた作文のみを公開しています。

■ 災害の記憶を次世代へ

三六災害から半世紀が経ち、災害経験者の高齢化等により、災害に備えるための知識や教訓が後世に語り継がれず、数世や十世の恐れがあります。「語り継ぐ“濁流の子”アーカイブス」では、後世に引き継がれず恐ろしい災害に備えるための知識や教訓などを伝す情報資源を伊那谷地域内外に、そしてまた後世に向け、語り継いでいきます。

「語り継ぐ“濁流の子”アーカイブス」では、三六災害に関する情報資源を収集しています。「情報資源を持っている」「地域の公民館に保管されている」等、皆様からの情報をお待ちしております。

くわしい取組情報はこちら

三六災害に関する情報資源は、天竜川総合学習館がわらんべや協力機関（新田市中野田書館、新田中野田研究所）に収集しています。

収集の経緯と「語り継ぐ“濁流の子”アーカイブス」で公開する資料の一覧はこちら

お問い合わせ

語りつく“濁流の子”アーカイブス
 ホームページ画面

六 『濁流の子』の取り組みを振り返って

製作当手を振り返って

三六災害という伊那谷の歴史に残る大きな災害。当時高校生だった私は、直接被災したわけではなかった。そんな自分が三年もかけて『濁流の子』という文集を出すことになるとは思っていなかった。ましてや、その文集がその後五十年余もスポットライトを当て続けられるような文集になろうとは、想像もしていなかった。

悲惨な境遇に見舞われた生徒達の話聞き、同じ学生として、小さなことでもいい、何かしてあげられることはないか、そんな思いがずっとあったと思う。

参考書一冊が、数百冊になり、全国の方の善意につながり、物理的にも精神的にも救われた方が多くいらつしやったのではないかと思う。そんな想いを知る立場にいたものとして、次は感謝の気持ちを善意の人たちに報告しようと思った。

自らの受験期を経たため、想定外に時間が空いてしまったことが、この『濁流の子』という文集を熟成させてくれたような気がする。

「災害から二年経って、新たに経験談を書いて欲しいとお願
いした時には、協力してくださいる方と、二度と水害のことは
書きたくないという方がいた。書いてくださらなかつた方が
協力的でなかつたということではなく、悲惨な被害を思い出
したくないというのも本当の気持ちだつたのだと思う。製作
時にはそこまで考えが及んでいなかったが、考えていたら
『濁流の子』は作れなかつたのではないだろうか。最近ほ、
テレビやインターネットなどで多くの情報が簡単に手に入
る時代である。被災者の情報もたくさん目にするし、その方
たちの想いに触れられる機会も多くある。しかし当時は「生
つた以上、その大切な「気持ち」を形にまとめることの使命
感をついつの間にか背負っていたのではないかと思う。

復刻されて多くの人の目に触れるようになって

当初、『濁流の子』を作つたのは五百部という数だつたの
で、ごく限られた人にしか配布できなかった。その後何年か
経ち、埋もれてしまつたという実情もあつた。

そんな初版本であつたが、天竜川上流工事事務所（当時）
から復刻版を出していただいたことにより、多くの方に見て、

読んでいただけるようになったのは大変大きな意味があつ
たと思う。文集の制作当時は、将来どうなるかなど全く考へ
ないでいたのだが、この文集の価値、存在意義を天竜川上流
工事事務所が見つけてくださったことで、自分自身でも改め
て認識することができた。復刻版として世に出たことにより
貴重な資料になつた。当時、三六災害の記録を残そうとがむ
しやりに文集という形にした種が実を結んだようで、とても
嬉しく思っている。そして五十数年経つた今日でも、その
思いが色あせる事なく受け継がれている事に深い感慨を覚
える。

『濁流の子・補遺』の製作

私の手元に残された七百点余の作文。それは、『濁流の子』
に掲載できなかった被災児童生徒の貴重な体験記である。

作文を書いた人の気持ちを考えると、何とかきちんとした
形に残したいとの思いで『濁流の子・補遺』にまとめ、平成
三十一年四月に発刊した。行政・教育関係者に、防災減災教
育の一助として役立てていただくことを願っている。

三六災害の教訓 後世へ

碓田さん(箕輪)「濁流の子・補遺」自費出版

伊那谷に未曾有の豪雨被害をもたらした1991年の「三六災害」を体験した子どもたちの作文を被災直後から収集し、記録文集「濁流の子」(伊那谷災害の記録)を64年に発行した箕輪町木下の碓田栄一さん(74)が、活動の集大成となる「濁流の子・補遺」を自費出版した。眠っていた作文に再び光を照らすようにと、初刊文集に収まらなかった約700点を収録。25日(土)は「防災・減災に役立ててほしい」と、国土交通省大蔵川上流河川事務所(駒ヶ根市)に30部を寄贈した。(勝村誠之)

三六災害が生じた当時、碓田さんは被災地の学校や自治体などの協力は伊那北高校(伊那市)2年に在学を受け集まった子どもたちの作文。教科書や参考書を流された受験は約100点。そのうち78点を抜き生を支援し、ちと取り組みを始め、粋し「濁流の子」を方り版刷りで約300部寄贈した。

500部寄贈した。被災から30年を経た1991年に

作文700点収録 天上に寄贈



「濁流の子」補遺」を手に、収録された子どもたちの作文原稿を見返す碓田さん(国土地産大蔵川上流河川事務所)

復刻。反響を呼び、同事務所はこの文集を災害教訓伝承活動のシンボルとして「伊那谷連理」に選定し、後世に語り継ぐための資料として電子化を進めてきた。

この日、同事務所を訪れた碓田さんは「濁流の子ができた記録になったことをうれしく思う」とあいさつ。補遺を受け取った伊藤誠記所長は「被災者の声が住民の災害に対する心のアンテナを強くする。貴重な資料を独力で作り上げたことに頭が下がる」と感謝した。

補遺に収録した作文の生原稿につ

いても今回、同事務所に託した碓田さん。「災害を体験した子どもたちのいろんな思い、災害の見方、さらにはどんな方法で避けたのか作文には生々しくつづられている。今回改めて手に取り、『残さなければ』という気持ちになった。私自身三六災害の教訓を後世に残すお手伝いができて喜びで、いっばい。濁流の子は幸せな本だと思ふ」と目を細めた。

同事務所では補遺を増刷し、学校や図書館、防災機関などに配布を予定。作文原稿も電子化して保存性を高め、関係機関で共有するほか、一般の閲覧もできるように検討していく。

今後の防災活動への想い

東北の震災以来、言われるようになったのが、まず自分の命を守る重要性である。『濁流の子』にもそういう内容を書いた作文がある。自分の命は自分で守らなければならない。経験している方はそれが身に染みている。そんな実体験の記録なので、身につまされる文章も多いが、説得力もある。ぜひ子供達にも読んでもらいたい。防災教育にも役立つのではないかと思う。

自然環境も変化し、今までになかったような形の災害や、規模の大きな災害が発生している現在、防災、減災のための様々な取り組みが行われている。ソフト面での取り組みとして『濁流の子』の作文がデジタル化され、多くの方にいつでも自由に情報として触れていただけることになった。過去の災害を知ること、防災意識の向上にも役立つのではと思う。そういう文集を残せたことが本当に幸せです。

七 おわりに

今回、この『濁流の子』の編纂を振り返って」という書籍をまとめるお話をいただき、五十数年ぶりに当時のことを振り返る機会をいただきました。

今から思うと、二十歳の若さ故の行動力であったのかと思いますが、多くの方々にお声をかけ、ご協力をいただいて発行できた文集だったと思います。五百部の文集が私の大きな財産となりました。

今回、『濁流の子・補遺』とともに、当時の資料一式を天竜川上流河川事務所さんに寄贈させていただきました。これをもって大きな区切りがついた気がします。復刻版・続編、そしてこの『濁流の子』の編纂を振り返って」という出版物をまとめてくださった天竜川上流河川事務所さんに感謝の気持ちをお伝えして、まとめとさせていただきます。

碓田 栄一（うすだ えいいち）

- ・1944年長野県中箕輪町（現 箕輪町）生まれ
- ・伊那北高等学校2年在学中に、三六災害を体験し、伊那谷被災地の高校受験生を励ます運動に取り組む。これがきっかけとなって、大学在学中の昭和39年に被災体験やその後の復興の様子などについての作文を編集した「濁流の子～伊那谷災害の記録～」をガリ版印刷で製作した。

三六災害の記録『濁流の子』の編纂を振り返って

令和2年4月発行

企画・発行：国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7番10号
TEL 0265-81-6411 FAX 0265-81-6419

著者：碓田 栄一

編集：国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
株式会社 環境アセスメントセンター

印刷：株式会社 宮澤印刷

「語りつぐ天竜川」の発刊にあたって

南アルプス・中央アルプスという日本を代表する山脈の間に形成された伊那谷と、その中央を北から南へ貫流する天竜川。天竜川流域は、美しく豊かな自然環境に恵まれ、古来より人々の交流が盛んで、固有の文化が育まれるなど、数々の川がもたらす恩恵に浴してきました。一方、名にし負う“暴れ天竜”は、昭和36年災害(三六災)に代表されるように、豪雨時には日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙をむき、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流河川事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑みをたたえ続けてほしいと願う人々の切なる気持ちに応えるため、永年にわたり、地域の皆様の多大なご協力の下、より安全な天竜川、より親しめる天竜川を目指して河川事業や砂防事業などの治水事業に取り組んできました。事業の実施にあたっては、流域内の自然環境や伊那谷に暮らす人々が長い歴史の中で築き上げてきた文化等を十分に理解し、地域の皆様との意見交換を行い、事業に反映していくことが大切だと考えています。

「語りつぐ天竜川」シリーズは、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の皆さんに天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てるために、昭和61年度より発刊してきました。今回の第65巻は、三六災害を経験した小・中・高校生らの作文を集め、当時学生だった碓田栄一氏によって発行された「濁流の子」の、編纂にあたっての作者の思いや編纂後の取り組みを記録したものです。

近年、自然災害に対する様々なハード・ソフト対策が整備され、災害を直接体験することが少なくなってきた結果、むしろ災害への意識が希薄になってきていると指摘されています。そのような中であって、被災直後の方々的心情に触れ、視線を共有することは、現代の私たちの災害への警戒心を呼び起こす重要な鍵になると考え、「濁流の子」シリーズの編纂の経緯を、語りつぐ天竜川として発刊することといたしました。

なお、ご執筆やお話を掲載させていただいた方々には、自由な立場からお考えを披露していただいていますので、国土交通省の見解とは異なる場合がありますことを付言させていただきます。

国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所
所長 伊藤 誠記

「語りつぐ天竜川」目録

- | 番号. | 題名 | 著者 |
|-----|----------------------|----------|
| 1. | 伊那谷の気象 | 米山 啓一 著 |
| 2. | 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤 秋司 著 |
| 3. | 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木 徳行 著 |
| 4. | 総合治水の思想 | 上條 宏之 著 |
| 5. | 総合治水と森林と | 中野 秀章 著 |
| 6. | 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤 武 著 |
| 7. | 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村 真直 著 |
| 8. | 村境は不思議だ | 平沢 清人 著 |
| 9. | 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢 秀夫 著 |
| 10. | 諏訪湖の御神渡り | 米山 啓一 著 |
| 11. | 理兵衛堤防 | 下平 元護 著 |
| 12. | 近世 天竜川の治水 ～ 伊那郡松島村～ | 市川 脩三 著 |
| 13. | 川筋の変遷 ～ 天竜川と三峰川の場合～ | 唐沢 和雄 著 |
| 14. | 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎 敏孝 著 |
| 15. | 天竜川の橋 | 日下部 新一 著 |
| 16. | 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原 優美 編 |
| 17. | 天竜川の魚や虫たち | 橋爪 寿門 著 |
| 18. | 天竜川のホタル | 勝野 重美 著 |
| 19. | 天竜川流域の村々 | 松澤 武 著 |
| 20. | 小渋川水系に生きる～ 人と水と土と木と～ | 中村 寿人 著 |
| 21. | ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡 忠一 著 |
| 22. | 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤 孝和 著 |
| 23. | 土木技術と生物工学～生きものを扱う技術～ | 亀山 章 著 |
| 24. | 戦国時代の天竜川 | 笹本 正治 著 |
| 25. | 天竜川の水運 | 日下部 新一 著 |
| 26. | 惣兵衛川除 | 市村 成人 著 |
| 27. | 紙芝居開墾堤防～下伊那郡豊丘村伴野～ | 竹村浪の人 著 |
| 28. | 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田 穰 著 |
| 29. | 天竜川の淵伝説～『熊谷家伝記』を中心に～ | 笹本 正治 著 |
| 30. | 天竜川の源流地帯 | 赤羽 篤 著 |

31. 東天竜 三浦 孝美、仁科 英明 共著
32. 天竜河原の開発と石川除 塩沢 仁治 著
33. 伊那谷は生きている 松島 信幸 著
34. 天竜川の災害伝説 笹本 正治 著
35. 天竜川の災害年表 笹本 正治 編
36. 天竜川水運と樽木 村瀬 典章 著
37. 水辺の環境を守る 桜井 善雄 著
38. 諏訪湖 ～ 氾濫の社会史～ 北原 優美 著
39. 河川工作物と魚類の生活 中村 一雄 著
40. 天竜川上流域の過疎問題 山口 通之 著
41. 資料が語る 天竜川大久保番所 松村 義也 著
42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 関岡 裕明 著
43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 藤森 明 著
44. 横川山巡覧記～『辰野町資料第 87 号』より～ 辰野町教育委員会
赤羽 篤 校訂
45. 天龍川の鳥たち 福与 佐智子 著
46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメ～ジの創造 浮葉 正親 著
47. 田切ものがたり 赤羽 篤 著
48. カエルと暮して 山内 祥子 著
49. 伊那の冬の風物詩 ざざ虫 牧田 豊 著
50. みんなの三峰川を次世代に 三峰川みらい会議
51. 三峰川ものがたり 三峰川みらい会議、北原 優美 著
52. 天竜川水系の水質
～「泳げる諏訪湖・水遊びのできる天竜川」を目指して～ 沖野 外輝夫 著
53. 天竜川の帰化植物たち 木下 進 著
54. 中央構造線読み方案内 ～ 諏訪から大鹿村地藏峠まで～ 河本 和朗 著
55. ふるさとの山 駒ヶ岳ものがたり 赤羽 篤 著
56. 近世信州伊那郡大河原村の自然環境と人間 松原 輝男 著
57. 地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし 松崎 岩夫 著
58. 伊那谷の土砂動態 九津見 生哲 著
59. 天竜川と生きて 下平 長治 著
60. 明日に伝える三六災害

～ 川路・龍江の水害体験談と子ども達の取り組み～ 川路・龍江の方々

61. 天竜川の川の碑 竹入 弘元 著

62. 「東日本大震災」の対応について

～ 初動対応～ 復旧・復興に向けて～ 熊谷 順子 著

63. 三峰川で生まれ育った鉄線蛇籠 北原 富美子 著

64. 天竜川・三峰川河畔でのミヤマシジミ保全 岡村 裕 著

65. 三六災害の記録『濁流の子』の編纂を振り返って 碓田 栄一 著



国土交通省

天竜川上流
河川事務所